

新年度を迎えて

茨城県統計課長 野口 貢



50年度は高度成長から安定成長へと移行の第一ステップの年でしたが、現在依然として、厳しい社会経済情勢のまま51年度を迎えようとしています。昨年度は、春から秋にかけて、農林業センサス、事業所統計調査、第12回国勢調査と、

いわゆる三大センサスの実施年ということで、多くの統計調査員の方々、加えて市町村統計担当者の皆様方に多大の御苦勞をわずらわしましたが、お陰様で恙がなく所定の成果をあげることができ、多忙であった1年を振り返り、今さらながら統計関係者各位の異状なまでの努力の賜であったと心から感謝している次第です。また昨年度のできごととして特記しなければならないことは、42年5月以降8年10ヶ月の長きにわたって、わが統計課がお世話になった県警察本部庁舎、5階の事務所から、本庁内第二付属庁舎二階に移転したことであります。スペース、間取りの関係で一課一室の原則を満しえなかったのが悩みのタネですが、今後は出来るだけの努力を傾け、かつ課員一同の積極的な理解と協力をいただきながら、一課一室の状態に近い一体性を保持していく所存であります。

さて、昨年度のもろもろのことにかかなりのスペースを費やしましたが、新年度を迎えるに当り、肝に銘ずべき点は、極めて厳しい社会経済状況が続くなかで、各層各分野での対応の問題ではないかと思われま。安定成長移行への2年目に当る51年度は、国・地方公共団体の財政危機はいまさらいうまでもないことながら、そのなかにあって新しい社会経済環境に対応できるような行政の体質改善が求められるはずであり、われわれ統計マンもひとしくその枠組みのなかでの業務遂行に最大限の努力を傾ける必要があるのではないかと改めて痛感されます。大方の人々がわが家の春を謳歌してきた高度成長から、価値観の転換を基調としつつ安定成長（低生長ともいえる）に移行しなければならない年であれば、行政自体

も必然的に選択的、かつ効率的な県民サービスでなければならないことは明かだろうと思われま。したがって統計のはたす役割りも過去とは比べものもない程の重要性が要求され、それにつれて統計本来の使命である真実性の確保と迅速な利用提供が特に重視されるようになるのは必定であります。この際、われわれ統計担当者は「統計が大海原での羅針板、暗夜の灯台」の役割をはたすという自覚をもって業務遂行に努力したいものです。

昨年度は国・地方公共団体を通じて、ひろく行政事務の見直しがおこなわれました。その結果は51年度の予算措置のうえに具現されるはずで、本県でも3月の第1回定例県議会で審議されております。本年度は国勢調査等の大調査を実施した昨年度に比べると、新規事業としては、商業統計調査、果樹基本統計調査があり、そのほかはいわば平時の事務事業ということではありますが、ひとつひとつの事業に質的向上の努力を傾注していきたいと望んでいます。

また統計調査は何といっても、現場第一線を分担する統計調査員の力こそ極め手となるわけでありますから、真に統計の重要性を認識し、かつ斯道に情熱を燃やす優れた調査員の確保と、研修が必要であって、このための調査員対策事業も重点のひとつとしているほか、調査環境がいよいよ厳しくなりつつある折柄、調査客体である事業所や世帯の皆様方の統計に対する理解と協力をうるための積極的な広報活動もより一層重要ではないかと思われま。ともあれ、新年度を迎えるに当って自分なりに考えていることは、一見無味乾燥とみられ勝ちな統計を、生命あるものとして、利用者・作成者・客体の三位一体の理解とコンセンサスのなかで育て、真に物事の判断基準として役立つことが現今にふさわしい統計のあり方ではないかと大それた望みを抱えていますが、「いうは易く、行は難し」でやはりステップバイステップが必要であり、大方の御批判と御指導をいただきながら努力して参りたいと存する次第であります。

「昭和50年国勢調査」を省りみて

その2

◇調査にあたり嬉しかった事例

神栖町

県立高校の職員住宅では、事務長が一覧表を作成してくれたので調査がやりやすかった。

荃崎村

農村部では、朝訪問しても「忙しい。」と言われ、夜行くと「字がこまかくて見えない。」(笑)と言われ、3回も4回も足を運び、ようやく「言うから書いてくれ。」ということになる。

中には、自分の勤めている会社の名前もわからない人がいる。「親方に聞いてこい。」(笑)と言って調べてもらっている。

秋山主事

農村部などでは書いてくれという人が多い。

野口課長

農村部では協力してくれているが、都市部が問題である。

日立市



都市部でも長くいる人は良く書いてくれる。1回調査区を回れば3分の2の人が記入してくれていて、書き方もきれいである。残りの3分の1については、2回ほど調査区を回ってその2分の1を回収することができる。そのまた残り6分の1が、一番困ってしまう。これにあてはまるのは単身世帯が多い。

自分の勤め先の名前を知らない人もいる。業種のことなどで工場に電話すれば、今度は工場自体が何を作っているのかわからない。ただ部品を作っているというだけで要領を得ない。これは下請などに多い。

司会

9,10欄については、世帯とか、一般事業所でも小さいところなどではわかりづらい。

荃崎村

工場に了解をとって、調査員が工場で説明をしたのでスムーズにいていると思う。

◇実査上生じた問題について

司会

調査が年々やりずらくなってきているが、批判、苦情等があれば述べていただきたい。

10月1日前に調査票を回収したところが、2,3あったので、調査期間がどうだったのか心配である。

神栖町

商業調査、農業基本調査の場合には、税についての不安で拒否の例もあるが、国勢調査の場合にはない。

司会

エンピツなどについてはどうか。

神栖町

予算があれば、1本ずつでもわたしたい。

日立市

国勢調査の場合、一般でも大体理解されているが、商業調査になると苦情がでてくる。

神栖町

今回の国勢調査は、前年に比べてプライバシー問題にもこまかい所までつっこんでいないということから、苦情が少ない。

野口課長

55年の本調査の場合にはかなりこまかいので、これは大変であると思う。

日立市

学歴、結婚歴などまでである。

神栖町

プライバシー問題がひっかかってくる。

野口課長

東京・大阪では、国民総背番号制への反対ということで問題がおきた。

本調査では、こまかい点まで調査するので大きな問題になる恐れがある。普段からのPRが大切である。

司会

先ほども触れたが、10月1日以降に調査票は回収してほしい。

神栖町

あまり早く調査票をわたしても、なくされる恐れがあり、また余分の調査票もそうないということもあり、調査員も悪意でしている訳ではない。

◇請査書類、用品について

日立市

調査票の大きさは現在ので適当だと思う。今の大きさでも折れた例があるので、今以上大きくすれば必ず折られるだろう。

司会

調査票の枚数が多くなると、書類入れに入らない。国勢調査についてのお願いなども入らないので、調査票だけ書類入れに入れて、お願いは別の袋で配り歩いたということもある。

前は手さげ袋であったが、改善されたと思う。

大子町

良かったと思う。

司会

ビニールの袋に調査票を入れるとき、調査票表紙のカドで袋が破れやすい。

エンピツ、消しゴムは良質であったと思う。

神栖町

調査員の証明書をワッペン式にし、胸につけるようにしてはどうか。今のワッペンを大きくして、氏名、番号などを入れ、その表示は役場などで記入する。

そうすれば「お前はなんだ。」などと言われたいだろう。



荃崎村

町ではそういうこともあるだろう。農村では皆顔見知りなのでそういうことはない。

秋山主事

以前はシンボルマークのバッジだったので、マークの意味を知らない人には意味がなかった。今回は国勢調査と表示したワッペンにしたので、わかりやすくなったと思う。

野口課長

腕章などでもよいだろう。

神栖町

それでもよい。名前を入れればよい。

野口課長

問題は人数である。

川上主事

書類入れのケースが小さかったという声があった。世帯が多いと入りきれないし、調査票だけを入れる訳ではない。

秋山主事

前回よりは大分丈夫にできていると思う。

川上主事

形にもいろいろと希望があったが、結局あれでおさまったようだ。

司会

記入例集に実際の練習例があればよかった。

前は調査票の部数不足がかなりあったが、今回はそれほどはなかったようだ。

世帯では良く書いてくれたので、不良、汚れや書き直しの調査票の例が少なかった。

日立市

今回は反故になった例が少なかった。前はけっこうあったのだが。

司会

取扱いをていねいにとお願いしてあるからだろう。

◇その他気づいた点、今後改善すべき事項、要望等について

司会

事業内容などの衆知については、社内報などを通じてP.Rしたい。

日立市

それについては強く要望したい。各企業の事業種類の一覧は、調査員にはきいているが、それを各企業の内部従業員にP.Rする点が不足している。

司会

ポスターの下には書いてあるのだが。

日立市

それが徹底していなかった。

川上主事

日立の中央研究所などいくつかのところではきちんとしている所もある。

日立市

市役所の方でも反省しているということである。

野口課長

県、市町村の責任でやらなくてはならない。

大子町

大子町の場合、工場勤務の人には会社で通達があったということである。

川上主事

ある程度小さな会社ならそれも可能だが、日立などの大企業ではなかなか徹底できない。

日立市

それだけに強く要望したい。

秋山主事

市町村段階の審査も大変であろう。



神栖町

前回調査時の10分の1と少なくなった飯場では、個人一人一人が調査に協力してくれた。

司会

一般に飯場などは調査しにくいのだが。

神栖町

住所、名前の不明例が前は多かったが、今回は少なかった。

前は全然調査に入れないような飯場もあったが、今回はそれがなかった。

現実として、農村部でも勤めに出る人が多く、昼間の調査は困難である。結局、朝や夜間に何回も足を運んで調査している。その苦労は大変であり、手当の増額を希望する。

大子町

従業地・通学地の調査は何のためか。

野口課長

人間の移動の状況を知るためのものである。例えば水戸市では、昼間人口は夜間人口より2割程度多い。昼間

どこに勤めているか、どの学校にかよっているかを調べることで昼間人口がわかる。これは交通等基本的な行政を行うためにはどうしても必要なものである。

川上主事

労働力の需給関係の調査などでもできると思う。

秋山主事

通勤・通学別や年齢別調査の項目は、後で利用されることが多い。

司会

国勢調査は夜間人口の調査であり、昼間人口は従業地・通学地別の項目がなければわからない。

神栖町

神栖町の場合、常住人口と国勢調査との間に大きな差がでる。

県の開発公社のようなものがあるが、その住宅では、住居の移動もしてくれない。週6日は神栖町にいても、家内をはじめ生活圏が別の所にあるのだから、そちらで国勢調査も行うと言って拒否されてしまう。

日立市

同様の例は日立市にもある。生活本拠は別のところにあるから、そちらで調査は行うと拒否されてしまう。そういう例はたくさんある。

神栖町

企業のおえら方というのは遠くに生活本拠があるので、そういう場合が多い。

司会

単身赴任の人が多いせいだろう。

神栖町

そう思う。

日立市

国勢調査も回を重ねるごとに楽になってきている。以前は午前0時現在ということで、3人ぐらいのグループをつくり、夜中に提灯をつけて調査して歩いたが、その頃は大変であった。浮浪者の調査もするというので、住んでいる穴倉にもずいぶん分かった。(笑)

今は午前0時現在といっても、実際の調査は夜が明けてからだし、一般の理解も大体あるので、楽になったものだ。

しかし他の調査、特に金銭面がからんでくると、抵抗がある。

神栖町

笑い話になるが、本妻と2号が同居している例があり、その続柄の書き方をどうするかという質問があった。(笑)

総和町

ある病院では、国勢調査が終るまで、患者の退院の予

定を延期したという。(笑) 病院にもよく説明しておけば良かったのだろう。

説明に行った時いたから、いなくなってはまずいと思ったらしい。

日立市

9月27日に子供が生れ、夫婦で産院に泊りこんでいる例があった。いつ帰宅するかわからないので、産院まで行って調査した。

川上主事

引越しというのはなかったらうか。

日立市

私の担当している2調査区で2人あった。単身者が多いし、まわりとのつき合いもないので、大家さんから聞いて調査した。

司会

総和町さんは始めてということだが。



総和町

夫婦で親戚に毎晩泊りに行っている世帯があった。周囲とのつき合いもなく、やっと親戚の住所をさがしあてて調査できた。

司会

留守世帯というのが問題である。

総和町

借屋などの場合、ポストもないし、近所とのつき合いもないというので周囲の家でも頼んでやってくれない。借屋や立て売りの世帯に結構多い。

◇全体を通して

司会

P・Rもしたつもりなのだが。

野口課長

回を重ねるごとに予算面でも、内容面でも改善しているはずである。

統計調査全般に通ずるが、直接の理解というものが無いので、何のためか、自分に何のためになるのかという根本的なくちがいというものがあて、これに対応するのはやはり第一線の調査員の方に足繁く運んでいただくほかにない。

今年も、県内くまなく広報車を走らせたり、予算不足で実現はしなかったが飛行機でのP・Rも考えた。P・Rについてはこれからもできるかぎり努力したい。

神栖町

今回の様な調査結果については、新聞の4分の1程度でもよいから各家庭にP・Rをお願いしたい。

司会

各市町村に概報という形で連絡している。

日立市

一般家庭向きに、市町村広報にも概数を掲載するよう県の方からも強く指導してほしい。今までは新聞でちょっと見る程度であった。

神栖町

神栖町では、町の人口推定懸賞募集を行い、100通程度の応募があった。

日立市

日立市でも行った。

事業種類の統一など、大企業体には依頼を徹底してほしい。

司会

前回調査のときもやっているとのことであるから、同じ様な形式でやっていきたい。市町村とよく話し合いたい。

特に日立市などでは、すいぶんと企業から調査員がでているようだが。

日立市

企業の寮などでは調査しやすいが、それ以外の従業員は市内全域に分散している。そういう人には会社などからの呼びかけが効果的であろう。

他の調査事項はむずかしくはない。

司会

職業欄がむずかしい。



大子町

調査員への信頼感が最も大切だと思う。この人なら何を言っても心配ないという気を持たせることが大切だ。

野口課長

調査は信頼感の中で行わなければうまくいかない。

日立市

同じ調査員を次回も起用してほしい。商・工業調査などでも、経験が長いと「何の調査か。」とやってくれる。

それでも金銭面に触れると抵抗があるようだ。同じ調査員が長くやってくれるよう県や市でも考えてほしい。そうすれば調査もスムーズにいく。

司会

国の報告会でも要望していきたい。

今後とも国勢調査をはじめ、他の調査にもご協力をお願いしたい。





感受性について

消費統計係 富永重己

われらトケイマンというコラムなのだから統計という分野について何かエッセイ風にでも書ければ、などと考えながら原稿用紙に向かった。元来、私は文章にあこがれている。小説が好きで学生時代にば割と多くの小説を読んだものであるが、今になって思えば私は小説好きでは決してなく、やはり文章好きだったのだと思っている。だから小説の主人公の名前やさらには粗筋などまるで憶えていない。粗筋など憶えてもない読書家が読書によって人間性を養われるはずはなく、従って今ある私はやはり人生経験の浅いあさはかな輩となっている。

そして話は「文章好き」についてであるが、文章の良さがよく出るのは随筆である。それは随筆家の人となり割とストレートに文章に現れるからであろう。随筆家というのはおそらく感受性の鋭い人種と見受けられる。われわれ凡人がなにげなく見過ごしてしまう事象でも敏感に心に受けとめている。感受性が強いということは、感じた事象をしっかり受けとめて判断、処理していかなければならない労苦をいやでも負うことであり、これはある程度人生経験を要しそうである。ところが悪いことに感受性は年をとるほど鈍くなるようであり、だんだん物事に感じなくなるようである。この辺が、良い随筆を書ける人が少ない原因になるかもしれないが、しかし幸いなことに随筆の文章というのは少々つたなくとも書く人の心で十分カバーされる。随筆の良さは随筆家の感受性の大きさによって決まってしまうのではないかとさえ見える。子供のようなみずみずしい感受性をいつまでも持ち続けていられる大人はすばらしいが、残念ながらも一般的にはどういわけか年をとるほどそれは弱くなってしまふものらしく、特に世間の荒波をうまくかいくぐってゆくにはこれはかえって無い方が有利なのかもしれない。ロッキード事件で証人換問され、知らぬ存ぜぬで

シラを切れたのも、それから多額のワイロを受け取った政府高官が知らんぷりしていただけるのも、幸いなことに「みずみずしい感受性」などというものはツメの先ほどもち合わせてはいないからに違いない。

近頃は若い人を批判するときに、ちょっと前の三無主義という言葉（無気力、無関心、無責任）にもうひとつ「無感動」を加えて四無主義と言うそうである。しかしここで無感動を加えて批判するのはどうであろうか。若い人が無感動であるはずがない。なぜなら一般的には年輩者よりずっと感受性は強いはずなのだから。これは思うに若い人の心が、その心に触れて感じたことを感動するという動きに現さないほどシラけているからかもしれない。ここまで来ると話題はその「シラケ世代」に移らなければならないが、それではこのまともまらない文章がさらにバラバラになってしまうのでよすことにするが、それにしても若い人をシラケさせる現在の社会環境は決して健全だとはいきれないだろう。無感動だといっている世代を批判するのはたやすいが、その世代をとりまく社会の責任はどうなるのだろう。うっかりすると本当に無感動な人間がやたらとふえてしまって、美しいエッセイを書くことの出来る随筆家など日本からいなくなってしまうはしないかなどと余計な心配をしたくなるのである。

感受性とは大切なものだと思う。はじめに、統計についてエッセイ風に分けたらなどと書いたがそのような才がもともとあるはずがない。しかしトケイマンたる私も感受性を大切にすることによっていつも新鮮な気もちでいたいものだと思う。そうすることが、無頭面をした数字のら列と対面しながらの毎日に少しでも新風を吹き込み、仕事上のマンネリズムをふせぐことになるかもしれないから。

迷解植物辞典

企画調整係 伊藤 宰

< あ ~ き >

アジサイ（紫陽花）……【原義】 ゆきのした科の落葉かん木。夏，青色，球状の花を開く。

【派生】 花ことは「浮気」である。その花の色が青や紫に変わることから，俗にいう「気が多い」ということに継がっているのだそうである。

「女心と秋の空」という言葉は，女心の変わり易さを表現したものであるらしいが，男心という奴もなかなかどうして変わりやすい。結婚式で誓いの言葉なるものを口にしたはずの人間が，数年たつと浮気をしたりする。

花の色の移り変わりをせめる人はいなくとも，人の心の移り変わりをせめる人はいるし，へたをすると命を落とすこともある。恐いことである。

いちじく（無花果）……【原義】 くわ科の落葉きょう木。花軸が卵をさかさまにした形にふくれ，中に無数のうす紅色の花をつけ，食用となる。

【派生1】 旧約聖書の創世記には，エデンの園にいたアダムとイブの楽園追放が記されている。リンゴを食べて羞恥心に目ざめ，いちじくの葉で体を隠したというのが，皮膚の弱い人ならかぶれるところである。

【派生2】 昔，「九」というしこ名のすもう取りがいたという。「一字」で「く」とよむところから，「いちじく」というしこ名だったそうである。

うどんげ（優曇華）……【原義】 三千年に一度花を開くという想像上の植物。インドに産するいちじくのことでもある。

【派生】 今ではあまり見かけないが，電球の傘の上に細い糸を立てたような不可思議なものが見られることがあった。これが「うどんげの花」である。じつはくさかげろうの卵で，成虫になると形はとんぼに似て小さい。成虫になって間もなく死ぬ。はかないことのとえに使われる「かげろう」というのはこちらの方で，「陽炎」

と書いて「かげろう」と読むのは別である。

えだまめ（枝豆）……【原義】 まめ科の一年草。夏，蝶形の花を開きさやを結ぶ。

【派生】 夏，ビルの屋上などで飛ぶように売れる。蝶形の花を咲かせるのは意味がない訳ではない。ただ一粒あたりの単価が高いのが欠点であるが，ピーナッツほどではないのがせめてものなぐさめ？である。

おうとう（桜桃）……【原義】 「せいようみざくら」，「すみせいようみざくら」，「みざくら」の総称。日本で植栽のものはたいてい「せいようみざくら」の系統である。実は「さくらんぼ」である。

【派生】 花はさておき，実の「さくらんぼ」の方に親しみをもつ。最近これも高くなってしまった。

かんしょ（甘薯）……【原義】 さつまいものこと。ひるがお科の多年草。夏，あさがおに似た紫紅色の花を開き，地下の根は食用。

【派生1】 さつまいもは「薩摩薯」と書き，薩摩の国（今の鹿児島県に属する）から伝わったという。別名では「琉球薯」，「唐薯」ともいうところをみると，薩摩へは，中国から琉球（沖縄）を経て伝わったものといわれている。焼くと大変よい香りがして，なぜか女心をときめかせる。

【派生2】 「官薯」と書くと，国の役所のことである。役所や役場は「公署」という。これは女心をときめかせない。

きく（菊）……【原義】 菊科の多年草，秋たくさん密生した花を開く。観賞用，食用。

【派生1】 花はさておき，食用になるところが魅力である。空間の菊まつりは有名であるが，あの花は，まつりの後どう処分するのだろうか。全部が全部食用ではあるまいが，調理して売り出すのも一案と思う。

【派生2】 番町皿屋敷に登場する「菊」はオバケである。 （この号終り）